

「東京真田町の会」会報

日本タボス

創刊号

「東京真田町の会」

会報創刊号に寄せて



会長 小林 孝雄

この度、真田町発足三十周年記念事業のひとつとして昨年九月十日に設立されました「東京真田町の会」の会報創刊号が、ここに目出たく発行の運びとなりました。この会報の発行は、会員相互の親睦交流をはかり、故郷との連帯を強める具体的な第一歩となるものと信じ、その誕生を皆様とともに心から祝いたいと存じます。

私共の故郷真田町は、私共が誇り得る自然と歴史の豊庫であります。さらに二十一世紀に向けて新たな発展を目指しております。私共は、本会報を通じて懐かしい故郷との出逢いや新しい未来への夢を描いていきたいと考えております。

会員皆様におかれましても、何卒本会に温かいご支援をお寄せくださいますよう、そして、本会が年毎に立派に成長して参りますようご協力をお願いする次第であります。



お祝いのじよば

真田町長 宮 島 静 男



東京真田町の会報「日本ダボス」の発刊を心からお祝い申し上げます。

ふるさと信州から離れた関東地方で多くの会員の皆様が真田町出身者として集い合い、また、各界、各層において御活躍されておられますことは、誠に心強い限りであります。また、平素真田町発展のためにお寄せいただいている絶大なる御支援、御協力に對しまして、この機会をお借りして厚くお礼申し上げます。

さて皆様御承知のとおり昨年は町が昭和三十三年に発足して以来三十年目の記念すべき年でありました。その記念として、数多くの事業、催しが大勢の方々の参加のもとに盛大に行われこれまでの歩みをふり返りまして、感慨無量のものがありました。振り返ります。



▲真田氏記念公園 (国道144号線沿い・下原区)

ば、この三十年の間、厳しい財政事情のもとで町の基礎づくりに専念し、今日の町の姿を見るに至りました。これもひとえに皆様方の御支援御協力の賜と深く感謝申し上げる次第であります。

平成時代を迎え、また、すぐそこに二十一世紀の足音が聞える現在、社会、経済、文化の潮流は大きな変化を遂げようとしております。これらの変化に積極的かつしなやかに対応し、真

田町に生まれ、育ち、住む人が自信をもつことができる個性的で魅力ある町づくりをめざしてまいる所存であります。

山紫水明の豊かな自然に恵まれたふるさと真田町も大変難しい時代を迎えてはおりますが、現在、大規模リゾート開発を計画

会報創刊号に寄せて

真田町助役 若 林 康 朗



真田町政施行三十周年を記念して、「東京真田町の会」が、真田町を郷土とする方々の積極的な御協力で誕生し、喜びに耐えません。

昨年九月十日、東京上野の池の端文化センターで二百名からの設立総会と祝賀会は、盛大かつ内容の濃い親睦と融和の機会です、その感激は忘れることができません。

東京、神奈川、千葉、埼玉の都三県にまたがる郷土出身の皆様、老若男女を問わず、本当に心を一にした、あの感動は是非とも再会や諸々の交流を約

し、特徴あるふるさとづくりを着実にすすめてまいりたいと考えております。

どうかこれまで以上に町の発展にお力添えを賜りますようお願い申し上げますと共に、貴会の益々の御発展と皆様方の御多幸を心からお祈り申し上げます。

しての固い握手、そして同郷の家族的な心のふれあい、遠く離れていても、郷土を想う郷土愛の心に、感激と感謝の念に耐えません。

本年は、くしくも平成元年の節目の年であります。真田町としても、行政、経済、産業、文化等々の発展のため、真田町の会の皆様の家族をも含めての交流を積極的に推進したいと考えてあります。毎年度の総会等で胸を張って、真田町の発展と会員の皆様との交流の成果を報告できるとような努力をしてまいりたいと思っております。

今、真田町は、二十一世紀に向けて、やがて来る第三次産業の時代の重要な課題でありますヒューマンウェアの自由時間都市基本構想等の数々のプロジェクトに取組み具体化に努力して

おります。

東京真田町の会の会員の皆様そして郷土出身の方々が自信と誇りをもって、多くの人々に真田町を御紹介御案内できるような、文化の香り高い産業経済の調和のとれた町づくりに努力したい所存であります。

終わりに、会員の皆様はいよいよの御健勝と御多幸と、東京真田町の会が、その目的にそって発展されますことを心から御祈念申し上げます。

真田氏館跡▶
(通称お屋敷・
県指定文化財)

創刊号発刊によせて

真田町議会議長 坂口 明



昭和天皇の御冥福を心よりお祈り申し上げ、新しい元号平成元年に心より敬意を表するものであります。

さて、昨年九月十日 真田町発足三十周年の記念事業のひとつとして、東京真田町の会が大勢の皆様方御参加頂き、盛大に発会式が開催できましたこと、ほんとうに嬉しく、皆様と共に心よりお慶び申し上げるものであります。

会設立に際しましては、役員の皆様には一方方ならぬご苦勞をおかけ致しました。心より厚くお礼申し上げます。おかげ様で町発足三十周年記念式典も、質素の内にも盛大に行われ、三十年の歩みをふ



▲残雪の烏帽子岳

りかえり感慨無量なものであります。そしてこれを土台として、二十一世紀に向けて新たな気持で魅力ある町創りをめざし発展いたしました。これも一重に、陰に陽に町勢発展の為にご尽力くださいました皆様方のご厚情の賜と心より敬意と感謝を申し上げます。

この度、東京真田町の会会報創刊号発行の企画をお聞きし、ほんとうに嬉しく寄稿させて頂きます。

先ず昨年の町の動きを紹介致します。農作物については全般的に日照不足という異常気象でしたが、野菜関係は市場相場が

良く順調でありました。が、果物、水稲は収量不足という結果に終わりました。特に十月三十日の季節外れの大雪にみまわれ、収穫直前のりんごに大きな被害を

あたえ、農家の打撃誠に大きなものであります。

行政については、町発足三十周年の記念事業の数々、町の宅地分譲二十一区画（前年三十七区画）完売、町営住宅六戸、菅平国際リゾートセンター、高齢者の待望久しかった屋内ゲートボール場、古城緑地広場等の完成、そして今本原地区への農業集落排水事業（下水道）の着手、また、役場庁舎全面改築にともしない現在実施設計にあり、三月中には着工を予定しております。

会報発刊を祝して

真田町教育長 松尾 一久



想の具体化については町の将来を展望して鋭意研究を進めており、新しい町創りに懸命の努力を致しております。

どうか会員の皆様、故郷を遠くはなれ厳しい都会生活ほんとうに御苦勞様です。どうか負けずに頑張ってください。そして、この東京真田町の会が皆さんの心の憩いの場となり、故郷の香りがいつもただようような温か味のある会に共々育って行きたいと心より願っております。



激動の昭和の歴史も終り「平成」への新発足。「東京真田町の会」の皆々様には益々ご壮健にてご活躍のことと拝察いたし、心からお慶びを申し上げます。

昨年九月、真田町発足三十周年を記念し、真田町出身者による「東京真田町の会」の設立は

まことに意義深いものでありご同慶に堪えません。三百余名が一堂に会しての設立総会・祝賀会のあの歓び、感激は一入であり、印象的な光景は今尚脳裏に鮮かであります。参会者ひとしく生きている喜びをかみしめ、明日への希望とはげみを抱かれたことと思います。これも生まれて育った真田町を、心のふる里、血につながるふる里、更には自分の生きている願望を託すふる里として、心の奥底に大きく息づく懐郷、愛郷の心の現れに外な

らないことを思い深甚なる敬意を表します。

今回ここに、創刊される会報は、会員相互の語りあい、ふれあいのひろ場として一層の親睦と連帯を深め、又ふる里真田町との交流の場として大きな役目を担い、会発展の基礎を培っていくものであることを思い、この発刊を心からお祝い申し上げます。

近年におけるさまざまな社会変貌は真田町にも大きく反映され、生活環境や生活態様も転換しつつあります。町では二十一世紀に向けて、住みよい個性的な町づくりをめざし、豊かな自然を生かし、ふる里の再発見による諸々の事業や開発計画が進められております。町づくりの基本は教育にあるを思い、人と人、心と心の暖かいふれあいを大事に、教育、文化、スポーツの振興に努力する所存であります。

窓外に目を移すと、小雪の舞う中に、真田氏の歴史を語り伝える本城や、昨年の暮れに竣工した屋内ゲートボール場に通うお年寄りの元氣な姿が目飛びこんできます。

どうか東京真田町の会会員の皆様もお元氣でお過ごし下さい。会のご発展を祈念しつつ。



創刊号の発刊にあたって

真田町役場企画調整課長 三井 俊男



会報日本ダボスの創刊誠に
めでとうございました。私は東
京真田町の会の結成の事務局を
担当して参りましたので、これ
までに至る経過とこれから計画
している交流事業等について申
し上げ、会員皆様多数のご参加
とご協力をお願いしたいと思います。
昭和三十二年十月一日に三ヶ村
が合併し今年度は満三十年とい

う記念すべき年を
迎えております。

この節目の年に
町ではいくつもの
記念事業を計画し
たのでありますが、
この内東京真田町
の会の結成につき
ましては最重要事
業として昨年の春
から計画を進めて
きたところであり
ます。

我が真田町を「心



真田町の会設立総会

▲真田町三井収入役の開会のことばでいよ
いよはじまりです。(設立総会から)

のふるさと」としておられる東
京、神奈川、埼玉、千葉の一部
三県に住んでおられる皆様方を
対象に町では町内全戸(二、九
二六戸)に紹介し皆様の氏名、
住所をお聞きしましたところ一
二一〇人のご紹介をいただいた
のであります。この方全員にこ
の会へのご加入をすすめ申し上
げましたところ五三四人(現在
も加入希望者がぼつぼつと増加
しております)という大変多勢
の方の賛同をいただいたのであ
ります。そして、昭和六十三年
九月十日、会員の皆様二三六人
と、来賓、真田町からの代表者
等あわせて総勢三百人が出席し

て池之端文化センターでの設立
総会が盛大に行われましたこと
は、誠によろこばしく存じます。
このことは、真田町から都会に
出ておられます皆様がいかに、
「ふるさと真田町」を思ってお
られるかという証であり、私達
もご期待にそむかない真田町を
つくり、そして素晴らしい真田
町を提供して行かなければと考
えております。

今、真田町では自然をいかし
ながら健康づくりを主体とした
スポーツと文化の香り高いふる
さとづくりを真剣にとりくんで
おります。

菅平ではスイス登山鉄道の導
入を「夢に終らせるな」を合言
葉に実現の方向で積極的なとり
くみをしておりますし、また、
傍陽地区には竹下総理の「ふる
さと創生論」による建設省新規
事業である「ふるさと公園」の
指定を受け、公園建設を開始し
たところであります。また「真
田氏ゆかりの里づくり」や「総
合スポーツパーク整備」「ふれあ
い広場の整備」更に「家庭合併
浄化槽を含めた全町的下水道化」

「役場庁舎の改築」などを計画
し、より魅力あるふるさとづく
りに努めて参る所存であります。
東京真田町の会は今後小林会
長を中心に皆様方の自主的な活
動をご期待申し上げるものとす
が、真田町としても「ふるさと

宅急便」「オーナー制度」「帰省ツ
アー」などご協力申し上げ皆様
と真田町との交流を一層深めて
参りたいと考えております。
最後に会員皆様のご健勝で、
益々ご活躍あらんことを心から
ご祈念申し上げます。



▲なつかしいあの顔、あの声300人(設立総会から)



ふるさと真田町の会の発展を願って

清水 清 晴 (中横道区出身)

私のふるさと真田町も、他の人の故郷にも風光明媚の山河や伝説、歴史を誇る特色が多くあると思います。私はふるさと真田町を後にしたのが、昭和十六年の四月、三年有余の外地での軍隊生活、復員後も東京に出て今年で四十七年余になりますが今でも故郷を一日たりとも忘れることなく、又離れる事なく生活しております。それは、私事

で誠に恐縮ですが、世帯をもつて以来、生家より送ってもらう信州味噌の味から始まり、春はわらび、ぜんまい、たら芽と秋はリンゴや野菜、時には高価な松茸の香に接するというつながりがあります。

又信州へ帰れば、通称天神山(天狗岩の手前の山)へ登り頂上より、田中、萩、大庭、曲尾を始め、真田町役場方面を眺めるのが大好きです。実りの秋の山頂から眼下にみおろす黄金の波は舌筆では表現することはできません。

▲天狗岩からの展望

今年の秋には田舎へ行っ
てと思ってい
た時、真田町
役場より一通
のハガキ「東
京真田町の会」
をつくり親睦
の和を云々、
これを見て私
は大賛成する
と共に喜びが

沸いて来た。信州のふるさとを遠く離れ、東京圏に住み素晴らしい共通の故郷を持つ者同士がお互いに知り合い、話し合い都会の風習の中に素朴な人情の触れ合いができるようになる、年を取ると尚さら考える。

ところが大役をおおせ付かり私のような者に出来るか心配でしたが、役場の助役さん始め担当の課長さん係員の方々のご尽力とご努力によることと、他の役員の方々の熱意により「東京真田町の会」の設立総会及び祝賀会が盛大に開催されたことは、ただただ感謝あるのみです。

設立総会、祝賀会の終了後の理事会に於いて、又々「東京真田町の会」の会報発行係をやることになりましたが、他の係員と会員の皆様のご支援とご指導を賜ってより良い会報をと考えております。宜しく願います。会報は会員相互の親睦と意思の疎通が第一であると思えます。この信条を忘れずに頑張つてゆきます。末永く一歩一歩すすめて、よりよい文化活動と親睦の輪と和を広げ「東京真田町の会」が大きく前進すると共にふるさと真田町の発展と繁栄に寄与したいと考えております。



▲町の花「つづじ」

私と真田町

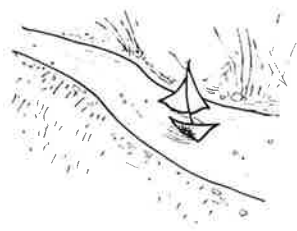
横 沢 正 晃 (大畑区出身)

私の祖父が四十二才、父が十才の時、大正十二年一家で東京へ移住して、もはや六十五年が経過しました。

私は戦争中の昭和十九年七月より昭和二十年九月迄本原村の祖父の家へ疎開し、本原小学校へ一年強、小三、四年迄通学しました。非常に敗戦間近で食糧もなく、ただ空腹と寒さの記憶が最も強くあります。秋には、冬に備えて山からストーブ用の材木を全員で校庭迄運ぶ作業が二日間あった事が印象に残っている。

今思いかえすと、やはり苦しい時、疎開時代を思い出すと、まだまだあの時の状態よりはましと思ひ、ファイトが出てきま

す。自分の子供達をたまには本原の家へ案内しても、ただただアゼンとして、こんな所に居たの！で全然他所の所との感じですが、私の家は絶対に戸籍は真田町から移動しない家憲になっていますので、長い時間をかけても故郷真田町を自分達のルーツと実感させるのが私のこれからの子供教育の一つだと考えています。



感激の東京真田町の会総会

三井 芳郎 (大庭出身)

九月十日は私達真田町出身者にとって大変うれしい日でした。私も少し早目に心をはづませて出かけました。受付を手伝うつもりで早く行ったのですが応援にかけつけて下さった真田町役場の皆さんが総べて分担してやって下さり何もお手伝いすることはありませんでした。昼近くになりますと関東在住の真田町出身者はぞくぞくと目を輝やかせて池之端文化センターへと集って来られました。

やがて、信濃の国斉唱で設立総会をはじめました。そして真田町のアナウンサーの司会で総会は順調に進行し、原案通り満場一致で承認され東京真田町の会は設立されました。

続いて祝賀会に入り声高らかに乾杯しました。それはみんなが健康で再会した喜びと故郷真田町と東京が結びついた祝福の心からの乾杯でした。役員の皆さんのご挨拶に続き祝宴は続きました。舞台では真田町文化協会の皆さんがすばらしい舞踊や詩吟、詩舞と次々きらびやかに踊られ吟じられ祝賀会をいやが上にも盛り立てて下さっていました。



▲角間溪谷

した。間もなく各テーブルは話が始まり信州弁混じりの声があだんだん高くなっていました。私は席をたつて中央の方に行きました。同じ村出身の人達に会いました。四十年ぶりです。なつかしさでみんな涙を浮かべてました。そして田中芳明(旧姓三井)さんに会った時は感激もひとしおでした。会いたかった一人です。私達二人は「ボーヤン、ボーヤン」と呼びあい抱きあいました。二人の胸中には子供の時の事が想い出されました。私の兄正人と芳明さんは同じ年の生れです。おとなりの家に生れ育ち大の仲良しでした。幼い時から成人になっても二人は「ボーヤン」と呼びあっていました。私も一緒にあっていました。芳明さんと兄は東京に来てからもしばしば一緒に勉強をしたり文通をしていました。二人共戦地、満洲とフィリピンに行っても文通してました。兄正人は昭和二十年七月一日レイテ島で戦死しました。私達はこの二十四才で死んだボーヤンを偲び語りました。四十二年ぶりの再会でした。二人は涙

真田町の言葉

塚田 恒雄 (横尾区出身)

水上勉とか司馬遼太郎の、関西を舞台とする歴史モノを読んでいると、亡くなった祖母が横尾で使っていた言葉に出会ってハツとすることがある。また、かつて一年半程大阪の阿倍野区に住んだときも、古老の大阪弁の会話の中に祖母と同じ言葉、例えば「オテショ」(小皿)、「ヌクトメル」(温める)等が出てきて驚かされた。祖母の使っていた言葉が果して昔の大阪弁や京都弁なのか、あるいは全国的な古語なのか、詳しく調べたことは無い。しかしながら、四〇〇年前には昌幸・幸村父子を中心とした真田の先達が、現

をふきふき「二人とも年をとったものだねー涙が出て」と笑いました。同じ東京の空の下で暮し乍ら会えなかった友が知人が今何十年振りに会えてみんな大喜びです。二、三時間はたちまち過ぎました。やがてお開きです。万才を三唱してもまだ話は尽きず、みんな帰ろうともしませんでした。

すばらしい設立総会と祝賀会が出来ました。真田町は乏しい町の予算の中から巨額の補助金

代でも信じ難い程の頻度とスピードで真田と大阪間を往来している。大阪在住時に九度山の真田庵を三回程訪ねたことがあるが、庵主さんがお茶を入れたがら色々の古事を教えてくれた。天王寺公園には「真田丸跡」が残っているし、今でも「真田祭り」が開かれている。こうしたことから考えれば、祖母の言葉に大阪文化圏の影響が色濃く出ていても不思議ではない。真田町の方言と言われている古い言葉には、間違いなく大阪・京都の古語、それも比較的上流の言葉が数多く入っていると思う。時間があつたら、一度確かめて

を会設立のために援助して下さいました。又総会と祝賀会に五十人もの大勢で真田町から応援にかけつけて下さいました。受付から総会、祝賀会、アトラクションに至るまでお世話下さいました真田町と真田町のみならず心に心から感謝いたして居ります。私は総会に出席出来て良かった。この美しい心の絆を大切に、会の親睦と発展、故郷真田町の発展を節に願うものであります。

みたいと思うし、すでに調べておられる方がおられたら、是非共教えて頂きたい。

「東京真田町の会」の会報創刊時に大阪の話で恐縮であるが東京に勤務しているときはどうも、真田を結び付けて考える機会に欠けていた。昭和四〇年に社会人となつてから、前述の大阪一年半を除く二二年間はというと東京勤務であつた。しかし、この間に特に「真田出身」の先輩と出会う機会も殆んど無かつたし、改めて意識して「故郷真田」を想うタイミングも無かつた。東京という街にも、神田とか人形町とか、下谷、上野とか各地にそれなりの村落社会が残っている。また、千葉、埼玉等の近郊住宅地では、町内会毎に盆踊り大会等の催事を開いて、新たな共同社会を形成するため

の努力を払っている。しかし、どうも東京地区は大阪地区と異なり、こうした環境が「真田」と結び付かない。やはり、仕事中心の殺伐とした都市が東京なのだろうか。最近では、国際化ハイテク化、情報産業化等がますます進み、東京の生活環境は一層心のユトリとはかけ離れていく傾向にある。

真田中学校を昭和三十三年に第一期生として卒業してから三〇年、若干の年齢を経たせい最近の仕事以外の生活にも関心が出てきて、東京における心の故郷とか自然とかを考え始めていた。丁度そのタイミングに、真田町から「東京真田町の会」を結成するから参集するようにとのご案内をいただいた。何となく、胸の中からジーンと嬉しくなつて、早速駆けつけさせていただいた。この会を通じて、東京地区においての「真田町の言葉」を数多く見出していくことを念じている。

「東京真田町の会」発足に当って

上原 辰 夫（中横道区出身）

真田町町制三十周年記念事業の一環として、町当局の熱心な御指導御尽力に依り、去る九月十日、台東区上野池之端文化センターに於て、「東京真田町の会」の設立総会及び祝賀会が盛大に開催されました。入会申込者五三四名のうち当日御出席の来賓の方会員を含む三三一名真田町当局関係者。町議会より坂口議長はじめ町議会議員並びに真田町各種団体長、衆議員議員羽田孜。井出昭一両代議士、池田長野県東京事務所長ほか多数の方々来賓の御出席を頂き開催出来ましたことは一重に町当局、関係者一同の御尽力のおかげと深く感謝致し厚く御礼申し上げる次第で御座居ます。此の「東京真田町の会」の設立に当っては、二回に亘り我が故郷真田町より遠路わざわざ上京されまして、私達設立準備委員一同に詳細に説明され懸命に御指導下さいました町役場当局、若林助役を筆頭に三井企画調整課長以下各関係部課の担当者の皆様方又大勢の設立準備委員の方々が公私共に御多忙の中を準備会議に出席され、「東京真田町の会」の発足を成功させるべく熱心な努力がありました。我が故郷真田町を誇りに思う首都圏在住の「東京真田町の会」会員と私達の故郷真田町の人達とが此の会を通じて、故郷真田町との繋がりを尚一層強くし、今後益々会員相互の親睦と故郷真田町との結びつきを一層深めると共に、益々発展致します様ご協力をお願いしたいと思います。尚、設立総会当日は、上京以来三十数年ぶりなつかしい人達にお会い出来幼い頃の昔話に花が咲き田舎弁が飛び出したりして時間のたつのを忘れる様な楽しい総会でした。

出席者全員が次の再会を期し又明日よりのそれぞれの健闘を祈念して散会となりました。今後此の「東京真田町の会」が益々盛大に発展する様に、会員一人

一人の協力と町当局のお力添と各役員の皆様が小林会長を中心に一致団結し、大きな和と輪が出来ます様お願いする次第でございます。私も役員の一人として微力では有りますが出来る限り会の為に懸命に頑張りたいと思いますので、会員の皆様方も総会及び各種行事が有る場合には、一人でも多くの方が参加されて会員相互の親睦を広げ我が「東京真田町の会」が益々の発展と会員相互の和と輪が広がる事を祈念し、会員の皆様方の御協力を御願い致しまして次回の再会を楽しみにして当日の出席者全員と「東京真田町の会」の

全員の御健康を祈りながら私なりの感想を申し上げまして筆をおかせて頂きます。



▲ももの花(横道)

▲唐沢の滝



「東京真田町の会」発会に想う

塩 沢 和 政 (大日向区出身)

この度、東京真田町の会が首都圏在住の皆様多数のご理解と参加のもと、町当局並びに町民の方々の暖かいご支援で無事に発足致しましたことを心から感謝申し上げますとともに喜び申し上げます。

私が昭和二十七年に就職の為千葉県に来た頃は、まだ真田町は発足していませんでした。その後、長・傍陽・本原の三村が合併して真田町として町政が施行されたと聞いたのは数年後で町名の由来は戦国武将真田氏からいただいたと聞いて、とても

よい町名を付けたことに感心したのを覚えております。

就職してから十年位は無我夢中でしたが年数がたつにつれて故郷のことを思い出すようになり、年に二、三回は親戚の処へお邪魔しております。

これからの日本はますます高齢化が進むことにより、仕事を離れてからの時間の過ごし方等いろいろな問題が提起されてくると思います。この時期に東京真田町の会が発足したことは誠

に意義のあることと言えます。

これからは東京真田町の会をよき媒介として首都圏に住む方々が故郷と大いに交流を深め連帯感を養い、東京砂漠といわれている無味乾燥な生活を少しでも潤いのあるものとするならば、非常に意義のある事と同時に東京真田町の会を企画したほんとうの意味が活きてくるものと思います。先日真田町町制施行三十周年に御招待を受け出席させて頂いたいただきましたがその時来賓の方々のお祝辞のなかで、真田町が全国でも有数の立派な模範的な町であることを知りました。これは町民の方々並びに行政当局の並々ならぬ努力のたまもの

ふるさと

清水 征 夫 (中原区出身)

東京真田町の会設立、おめでとうございます。ここに皆様方と共に祝いできますことを大変嬉しく思います。

月日の立つのは早いもので、私も東京へ出て三十数年が過ぎ戦後の復興で日本経済も、一喜一憂していた時代かと思えます。

東京タワー・高速道路・高層ビルと、目まぐるしく変貌する東京でした。ふと、懐しく故郷に悩裏を掠

めながらも、仕事におわれる毎日でした。

そんな折、過日、真田町の会のお知らせを受け喜んで入会した次第です。

生まれ育った真田町。朝に夕に烏帽子岳を仰ぎ、南に蓼科、美しヶ原、西にアルプス、北に菅平と、めぐまれた自然の中で幼少時代を送った自分に誇りを感じます。

真田町の会設立にあたりまし

と敬意と感謝の意を表す次第です。私は東京真田町の会、会員として会員相互の理解と連帯感を深め、会を発展させ本会の目的を達成出来る様、皆さんと一緒に努力したいと思っております。最後にになりましたが、東京真田町の会の会員の皆様方の益々のご繁栄と健康を祈念いたしまして私の本会発足の所感いたします。



▲さくら(戸沢神社)



て、東京、神奈川、千葉、埼玉に在住する真田町出身者の会員相互の故郷の交流を深めることができれば、この上ない喜びでございいます。

これひとえに、役員ならびに町役場の皆様のご熱意とご尽力があればこそであり、ここに紙

上をかりて厚くお礼申し上げます。今後とも、なお一層のご協力をお願いを申し上げます。東京真田町の会の益々のご発展を、皆々様のご健康を心から祈念し、粗辞ですがお祝いの言葉といたします。

東京真田町の会の発足を喜ぶ

山口 元彦 (横浜区出身)

故郷真田町を出てからはや二十七年が過ぎた。学生時代は兎も角、仕事に就き家庭を持つてからは、忙しさにかまけて、段々足が遠退いてきている。それでも盆と正月だけはなんとしても行くようにはしているが、短期間で慌ただしく飛び帰ってくる状況である。

それにしてもこの間に真田町もかなり変化したように思う。我が横沢を取り巻く山々には高圧線の鉄塔が立ち並び、菅平は長閑な牧場から一大レジャーセンターに一変した。子供の頃水遊びをした神川は今やわずかな水しか無い小川になってしまい息子を遊ばせることもできない

状態である。高校の通学で親しみかつ帰郷の折に誰かに会う楽しみも場だった電車は廃止され線路は道路に変って、都会の車が引きも切らず通り過ぎて行く。そして知っている人は徐々に少なくなり見たことのない人々が多くなっている。

このような変化をプラスと見るか、マイナスと見るかは人によって異なるであろうし、そこに住み働き生活しているわけではない者がとやかく言うべきではないが、しかし真田町を故郷として想っている者にとっては「鬼追いしかの山——」というイメージからは段々離れたものになってゆき、また自分がよそ者になっていきつつあるという感じがすることは否めない。

この度町当局からの呼び掛けにより東京真田町の会が発足したのは、丁度このような気分になってきた折なので、私にとつては誠に時宜を得たものであり喜んで参加させて頂いた。これにより、真田町の「町民権」を回復できる気がするし、これまではたまに帰郷した際にわずかに垣間見る程度であった町の様子を、普段からしかも全体的に

知ることができるようになり、また首都圏在住の同郷の方々とも広く交流することが可能になり誠に心強い。

尤も、会はまだ出来たばかりであり、それも殆ど全面的に町役場の担当者の皆さんが御膳立てしてくれたもので、今後本当に内容の豊かなしつかりした会に成長できるかどうかは、私達会員の努力いかんにかかっている。又それだけにやりがいもあると思う。私も微力ながら会の発展のためにできるだけの努力をしていきたいと思う。



▲菅平高原

▲一面銀世界
(菅平高原スキー場)▲熱気あふれるラグビー
(菅平高原のグラウンドにて)

ふなれんじーん

森 本 幹 生 (入軽井沢区出身)

私は絵描きですが、今、川崎市企画の展覧会の準備に追われています。これは偶然知ったのですが、講師を務める教室の生徒の父が、私がラグビーを観に国立競技場に行っていた頃の名ラガーで、今でも夏コーチに菅平へ行っているとの事でした。よく名前を知っているのも驚きでしたが、相手も私があの町の出身であるのと知って驚いていました。今や菅平は、若人、いや知らない人はいない程良く知られています。そこで私にはひとつの夢があります。それは文武両道ではないですが、菅平に

つか美術館を建てたらと思うのです。優れた作品をラガーを含めた若者や新しい訪問者に観て頂いたら、さぞかし菅平はなくてはならぬ所、夏・冬と全国から人が来るのではと思います。これは夢にしておきたくない実現したい私の夢です。如何でしょうか。末永くこの会が発展し真田町にとつてもより効果的な会になる事を心より願っています。



故郷

田中恒夫 (横尾区出身)

真田町の皆様、東京真田町の会の皆様お目出とうございます。新幹線が家の前から横尾まで通じたような感じですよ。

月日の流れは早いもので私共も突然の転勤で故郷を後に西も東も分らぬ都会へ来まして早や二十数年、一時も故郷を忘れる事は出来ません。四季折々春にはもう山菜の時期かな、夏には田植かな、秋には取入れかな又きのこが出たかなと色々話しては懐かしんで居ます。

新鮮な野菜やお米、山菜きのこ迄急便で送って頂いては感謝して居る所です。



こんな故郷真田町に生を受けしみじみ幸せを感じて居ります。帰郷のたび毎に町の発展には目を見張るようです。本当の理想郷に変わり真田町の益々の御発展と御繁栄をお祈り申し上げます。

東京真田町の会に出席して

石垣節子 (曲尾区出身)

私は曲尾の出身です。東京北区のさやかな内科開業医の妻でございます。東京真田町の会を心まことにしていた一人です。

この会の準備から理事という大役を仰せつかり困惑いたしました。が、東京在住の方はもとより真田町の方々にもお逢いできる喜びを期待して、お引受けした次第でございます。

戦時中、東京より現地に疎開し僅か二年半の生活でしたが、その間、傍陽村役場に勤務させていだいたお陰で、皆様方のお顔とお名前をおぼろげながら記憶しておりました。この度、たくさんのお同郷の方々のお元氣なお顔を拝見して、たいそう心



▲四阿山の的岩

強く感じました。

四十年ぶりでお逢いしても、私達の中には目に見えない故郷の心が流れあっているからなのでしょう。郷土を愛する美しい心が寄り合い郷土を語り合い、同じ思い出の時を過ごすことは、あわただしい都会暮らしをする私達にとって、これほど懐かしいものはありません。郷土愛に結ばれた同県人の集いの場の楽しさは終生忘れることは出来ません。この様な楽しい一日を過ごさせていだいた関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

末筆ながら、この会の益々の御発展と、皆様方の御健康をお祈り申し上げます。

“ふるさととは遠きにありて思うもの...”という言葉は何処で使うのでしょうか、と思うほどに近年の交通事情は夢がどんどん実現されて、線路は昔に比べるの特急が1/2の時間で走るようになり又道路も高速がどんどん発展しつつある現在、ふるさとへの想いを馳せた頃はそこへ着いているという今日この頃です。ところが、先日はおもいがけない企画のもとに、ふるさとの感慨にあらためて浸れました。三百人の人々が一堂に会った時は、郷土色という色はこんな色なんだとあらためて感じ入りました。それはホッとする色、英語もHOTOは暖かいという意味だなどと連鎖的にあたたかい気分を感じました。

さて、昔へ想いをしますと私達の子供の頃の学校はまだ分教場だったということ、その平分分校の頃、長本校は異国位に感じたものでした。ましてや、傍陽曲尾などまったく知らない減多に訪れることのない土地でしたので、それが町というひとつの輪の中に入り、そして又、三十数年経った今、身近なものへの見直しという意味で真田町

ふるさとの人々との出会い

長屋京子 (菅平区出身)

の会は思いがけないプレゼントとなり感激しています。

そんな雰囲気の中で思ったことは、一人ではなく三百人の否五百人の会員のエネルギーが将来何か意義あるものに出来たら何とすばらしいことでしょう。たとえばボランティアなど、一人の力ではあまりにも小さすぎますし...と考えると胸がふくらみます。

ともあれ、ふるさとを同じくしている私達ですので、これからはむずかしい事は日常の生活の中で片付けることにして皆さんと向き逢ったら(このいきあう)という言葉は長野のなつかしい方言です(よね) ホッとする時間を育んでいきましょう。

この会がより明るく健康に発展して行くことを願って...



▲菅平牧場

追憶

横沢清人（大畑区出身）

私には故郷が二つある。生れ故郷は、現在の北朝鮮咸北道会寧である。父が京城警察学校を出て、会寧警察署に勤務していた、大正十三年五月に私は生れた。翌年の十一月母が二十二才の若さでこの世を去り、父は母の遺骨と共に、生後一才半の私を連れ父の実家である、本原の祖父母のもとに私を預け、任地の朝鮮に帰っていった。幼児だった私は、当時の記憶は全くないが、もの心ついた頃には、温い慈愛に満ちた祖父母に育てられていた。私の記憶の中にある故郷は真田町本原である。一番古い記憶は、アメリカの西部劇に出てくる幌馬車のような格好をした乗合馬車が、砂利道を砂けむりを上げながら上田まで走っていた。そのご間もなく昭和



▲廃止前の電車（真田傍陽線）（昭和47年）

三年五月に電車が開通した。ものの珍らしく感じたのか、線路ぎわまでよく電車を見に行ったものである。私の育った家は、大畑区に一部属した川久保にあった。旧道に面した家のすぐ裏に神川があり、その清流のせ、らぎの音を子守唄の如く聞きながら寝たものである。近くに通称東北町という田舎町があり、東北銀行をはじめ、ひととおりの商店が軒を連ねていた。料亭三軒、カフェ四軒もあったことを子供心に憶えている。繭の取引をした東北繭糸会社更に演芸座もあり、興業開演の日には花火を打上げ、近隣の村々に知らせたものである。地理的に長村、傍陽村と上田の間に位置した故郷が、市場的な役割を果たし、夏には市がたち納涼花火大会が催され大変賑わった。半世紀も前の当時の思い出が懐しく走馬灯の如く今でも脳裡に甦ってくる。それから数十年世は移り変わり、現在は昔日の面影もないが、昭和初期の経済大恐慌の時代にしては、不思議な現象であった。帰省する度に「かの山鳥帽子岳かの川神川が、昔のままの姿で迎えてくれる。その時蜻蛉、蟬

▲町の木「しらかば」



蝗採り蜜狩等、幼き日の思い出が甦がえり、胸が熱くなり「忘れ難きふるさと」の心境に浸るのである。今晚を閉じ過ぎ去りし当時のことを追想すると、昭和六年春本原小学校に入学し、最初に遠足に行ったのが長村の白山神社だった。余りに古いことで記憶はさだかでないが、五年生の頃、傍陽村を経て地藏峠に遠足に行った時引率の先生が峠の頂上から眼下の松代町を指差しながら佐久間象山という偉い蘭学者の出身地であることを説明し、「男子志を立てて郷関を出ず、学若し成らざんば、死すとも還らず……。」と漢詩を朗吟した。私はこの時の詞に深く感動した。その遠足が、その後の私の人生を変える動機となった。私も上級学校に進み学問を修め度いと思うようになったが、貧農の家に育ち母に死別父に生き別れの状況のもとでは

東京真田町の会に出席して

田中すみ子（菅平区出身）

私の願望は所詮不可能であった。育ての親である老いた祖父母を説得し、昭和十三年四月十四才の春、青雲の志を小さな胸に秘め、下原下の無人駅より東京の姻戚を頼りに、一人寂しく旅立った。覚悟のうえ上京したものの、幾度か故郷の空を仰ぎながら、望郷の念止みがたく涙を流したことが。夜学に通いながら職を転々とし、座折しそうになったことも幾度か、その都度何のために故郷出て来たのか？故

郷の老祖父母のことを思い出し自らを叱咤激励し、七年間に及ぶ苦学生生活を卒え、社会人となり子供達も夫々独立し、東京でなすべきことは漸く終ったら今年で故郷を出て丁度五十年。還歴も既にすぎた故会社を引退しこれからの余生を、今まで仕事と子育てに追れ出来なかった好きな趣味を満たしながら日々の生活をエンジョイして暮し度いと思うようになった今日この頃である。

東京真田町の会に出席して一ヶ月が過ぎました。思いのほか盛大な会で感激致しました。

役員の皆さま方のお骨おりと御努力の賜と感謝申し上げます。御礼状を差上げなければと思いつつ一ヶ月が過ぎてしまいました。

過日長屋京子さんよりおはがきをいただきました。感想を書いてほしいと依頼されました。出席のはがきを出した時は会員が五百名以上いるとは思存じませんし、50、60名位で知っている人がいなかったらどうしようかでも真田町の人達だからと思



▲なつかしい話に花が咲きます

切って出席しました。

会場につきましては余りのにぎやかさにびっくりして席につきますとみんなどこかでお逢いをした顔が並んでいて四十年ぶりに同級生の宮沢健さんにお目にかかりました。町会議員をしていると聞き二度びっくり、中学生の頃を想像しているものから50才過ぎていたことを忘れてしまったのです。友人や知人が活躍して故郷を守ってくれていることにとても嬉しく感じました。故郷の人達の顔は、みんな懐かしく知っている方ばかりのように思えました。都会に出て30年余りいつも故郷は心のかたすみに想い出されます。そして同じ心をもつ仲間の皆さんがこんなに大勢いらつしやることに心強く感じました。あちらこちらで記念写真がとられ楽しげな語らいの時はあつと云う間に過ぎました。真田町を朝6時に出発して私達一人一人におみやげまで用意下さった役員の皆さまには大変だったことと思えます。御礼と感謝を致しますと共に真田町が発展してゆきますことをお祈り申し上げます。楽しい時をほんとうにありがとうございました。不順な天候つづきで今年も後二ヶ月で終わろうとしておりますが皆さまの御健康と御活躍をお祈り申し上げて感想文と致します。

東京真田町の会

三百三十名参集 設立総会を開催

真田町発足三〇周年を機会に東京、神奈川、千葉並びに埼玉の都三県に在住する真田町出身者と「ふるさと真田町との結びつきを深めると共に相互の親睦と発展を図る」という目的で「東京真田町の会」の結成を計画され、真田町役場は宮島町長を先頭に、若林助役、柄沢総務課長、三井企画調整課長、小市係長、山宮係員などの指導により、千代田区二番町の「番町グリーンパレス」に、役場から指名された二十数名が設立準備会員となり、七月一日(金)と七月二十九日(金)の二回にわたって、設立準備会を開催した。その時の会員は五百七名で、総会時の名簿によると五百三十四名になる。

九月十日(土)正午から上野池之端文化センター二階大広間で「東京真田町の会」設立総会設立祝賀会を開催した。当日は午前十一時三十分より受付のご案内にもかわらず、会員は十一時前から集合しはじめて来た。熱心な町役場の方々のご努力ご尽力により、会員二百六十名と町当局関係者、来賓など六十五名、合計三百三十一名の参加者で盛大に設立総会、設立祝賀

会が開催された。

定刻に全員着席し、司会者は真田町有線放送のベテランアナウンサー堀内孝子さんが担当され、県歌「信濃の国」の斉唱で始まり、三井収入役の開会のことば、小林設立準備会会長のあいさつ、真田町長あいさつ(代理・若林助役)三井課長の設立経過報告があり、仮議長に松尾教育長が選出され、議事の第一号議案「会則について」、第二号議案「役員選任について」までは町当局で進めて頂き、二号議案で役員が決定、紹介されたので議長交代で小林会長が議長に就任した。

議案三号、昭和六十三年度事業計画案について、清水副会長が、設立総会、会報発行、会員名簿の発行、真田町発足三十周年記念式典・十月一日(代表参加)と、記念式典の中で「二十一世紀へのメッセージ」としてタイムカプセルの中に行政資料個人の便りなどを入れ、封印し三十年後の二〇一八年に開封すること、町の過去、現在、未来をテーマに、夢と希望を持った町づくりを示唆するビデオのこと、ふるさと公園、ミニリゾートの開発に伴う都会の参加自治体、オーナーなどが報告、続いて三井会計理事の第四号議案の予算案について、「町役場より多大な補助金を頂いた」こと

などが報告された。

祝辞は羽田代議士(代理)、池田県東京事務所長、坂口真田町議会議長と続き、その後、来賓者の紹介、かすや国務大臣の祝電などが披露され、無事に総会は終わった。

午後一時過ぎから設立祝賀会にうつる。開会・会長あいさつ後、設けられた舞台に四斗樽が用意され、羽田、池田、坂口、若林、小林の五氏の振りおろす槌と同時に、真田町の会と名入り一合マスで乾杯となる。

ビデオの上映、歓談となる。

その間、舞台では真田町文化協会会員(約十五名)のアトラクションが、詩吟、詩舞、民謡、歌謡曲、舞踊などが行なわれ最後の方で「真田町音頭」を全員でお勉強、

(一)ハ

信州真田はヨ

六文銭の真田ゆかりの

城下町 ホントネ

残る城跡 お屋敷跡に

燃えて真赤な

山つつじ ソレ

へホンによいとこ

真田の町は

四季のながめが

ソーレソーレ日本一

(以下はやし同じ)

(二)ハア

君とゆこかヨ

城跡めぐり

真田ロマンの謎解きに

ホントネ

若葉踏みわけ 真田の城に

のぼりや上信

ひとながめ ソレ

(三)ハア

肩と目元にヨ

豊かな頼に

衆生済度の

深い慈悲 ホントネ

馬頭観音拝したあとで

洗馬の川沿い

仏岩 ソレ

(四)ハ

日本ダボスとヨ

どなたがつけた

スキーするなら菅平

ホントネ

粉雪捲きあげ

うわさのあの娘

恋のゲレンデ

ひとすべり ソレ

(五)ハア

山は烏帽子に ヨ

根子 四阿と四季に趣き

尽きぬもの ホントネ

谷の沢水 幾筋あつめ

末は千曲の神川に ソレ

(六)ハ

真田町にて ヨ

受け継ぐものは



▲設立総会の記念品

真田町でご用意下さった「東京真田町の会」と赤印刷された袋に、菅平のモロコシやリンゴナメコ、「東京真田町の会」名入れタオルなど、沢山のお土産を頂き、再会と相互の健康を祈りつつ帰路についた。(副)清水記

信州の東京十月号より転載

武將の知略と菅平ホントネ
いつも変わらぬ和と輪の心
明日へ大きく伸るゆめ ソレ
時間のたつのも忘れて歓談、二十年ぶり、三十年ぶりで逢う人もあり、なつかしい友、友、友の顔、顔、顔である。
午後三時三十分、真田町助役の音頭で「東京真田町の会」の万才三唱してから、「ふるさと(鬼追いしかの山)」を全員輪になって合唱、荒木副会長の「ふるさと真田町」の発展向上を祈り万才三唱、三三五拍子でめでた滞りなく終了した。



◀笑顔で歓談



▶乾杯

昭和63年度・平成元年度

役員一覧

会 長

小林 孝雄

副 会 長

横 荒 清
沢 木 水
正 孝 清
晃 一 晴

理 事

塚 三
田 井
恒 芳
雄 郎

会 計 理 事

理 事

監 事

塩 横
沢 沢
和 清
政 人

長 石 荒 田 森 高 山 清 清 上 柳
屋 垣 木 中 本 畑 口 水 水 原 沢
京 節 広 恒 幹 悟 元 征 茂 辰 義
子 子 之 夫 生 郎 彦 夫 行 夫 祝

昭和63年度予算

(単位：円)

収 入 の 部		支 出 の 部	
会員年会費 (1人1,000円)	500,000	設立準備費	50,000
設立総会会費 (3,000×200)	600,000	設立総会費	1,650,000
真田町補助金		会報発行費	150,000
運 営 費	300,000	会 議 費	100,000
設立補助金	900,000	事 業 費	100,000
雑収入金	10,000	事務費 通信費	150,000
		印刷費	50,000
		雑 費	50,000
		予 備 費	10,000
合 計	2,310,000	合 計	2,310,000

東京真田町の会

会 則

(名称及び事務所)

第一条 本会は東京真田町の会と称し、事務所を会長の指定するところに置く。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに故郷(ふるさと)との交流を深め相互の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、第2条の目的を達成するため次の事業を行う。

- (1) 会報及び会員名簿の発行
- (2) 親睦会、講演会、懇談会等の開催
- (3) ふるさと訪問等必要な事業

(会員)

第4条 本会の会員は、原則として、東京都、神奈川県、千葉県および埼玉県に在住する真田町出身者とその親族及び真田町関係者で、本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。

(役員)

第5条 本会に次の役員を置く

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 3名
- (3) 理事 若干名

(会計理事2名
監事2名を含む)

(役員の選任)

第6条 役員は理事会において会員の中から推薦し、総会において選任する。

- 2 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(役員の任務)

第7条 役員の任務は、次のとおりとする。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を総括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 会計理事は、会計を処理する。
- (4) 理事は、本会の重要事項の協議に参画する。
- (5) 監事は、本会の会計を監査する。

(顧問・相談役)

第8条 本会に顧問及び相談役を置くことができる。

- 2 顧問は理事会で決定し、総会で報告する。
- 3 相談役は、理事会の推薦

により会長が委嘱する。

- 4 顧問及び相談役は、本会の重要事項について会長の諮問に応じる。

(会議)

第9条 本会の会議は、総会および理事会とする。

- 2 総会および理事会は会長が招集し、その議長となる。
- 3 総会および理事会の決議は、出席者の過半数をもって決する。
- 4 総会は毎年1回開催し、会務報告、事業計画及び予算、決算等重要案件を議決する。

5 理事会は必要に応じ開催し、総会で決定する以外の重要事項を審議し決定する。

(部会)

第10条 事業の円滑な運営を図るため、本会に部会を置くことができる。

(経費)

第11条 本会の経費は会費・寄附金及びその他の収入をもつてこれに充てる。

(会計)

第12条 本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月末日までとする。

(会則の変更)

第13条 本会則の変更は、総会の議決を得なければならない。

(その他)

第14条 本会則のほか必要な事項は、別に定める。

附 則

この会則は、昭和63年9月10日から施行する。

東京真田町の会

細 則

この細則は、理事会の議決によって定める。

1 事務所

本会の事務所は、会長の指定した次の所在地とする。

〒233 神奈川県横浜市中区

日野 4-45-5

(会長宅)

☎ 045-843-8041

2 入会及び会費

本会に入会しようとする者は郵便振替にて年会費千円を振込み申し込むものとする。

3 部会

部会は、会員居住地区別に設

置し、または、必要に応じ出身地別に設けることができる。部会の運営は、本会会則に準じ、単独行事については、本会に報告するものとする。

4 住所等の変更

会員は、住所等変更のあったときは、本会事務所に報告しなければならない。なお東京都及び神奈川県、千葉県、埼玉県の各都県外に転出したときでも本人の申告があれば会員を継続することができる。



真田町発足 三十周年記念式典について

昭和六十三年十月一日、昨日までの雨空がうそのように、きれいに晴れ上った真田町の文化会館において、真田町発足三十周年記念式典が挙行されました。「東京真田町の会」を代表して私共夫婦と委員の三井芳郎および塩沢和政の両氏が出席いたしましたので、会員皆様にその模様をご報告いたします。

式典参加者は約二百六十名。県知事、上田市長ほか市町村長、地方行政機関、報道機関、旧三ヶ村の代表者、井出代議士、町役場、議会の役職者等各界から多数の方々が参加されました。午前九時三十分、先ず「町民

憲章」の斉唱で開始されました。

この「町民憲章」は、昭和五十五年十月の二十周年記念の際、町花（つつじ）、町木（しらば）とともに制定されたもので、真田町の町民であることに誇りと生きがいを持ち、よい町民となるための心のよりどころとしてしようとするものです。

宮島町長の式辞に続いて、町政の発展に貢献した方々への功労彰、感謝状の贈呈、来賓の祝辞があつて式典を終了しました。

この後、「東京真田町の会」の設立総会の際にも上映された「町発足三十周年記念製作ビデオ」『甦れ 真田の精神』が上



▲30周年記念式典から



▲30年後の未来へ託し「メッセージ」をカプセルに封印(30周年記念式典から)

映されました。ビデオに続いて三十周年記念事業のひとつとして四月十三日に結成された消防音楽隊結成記念演奏があり、見事な演奏が会場の雰囲気盛り上げました。

以上の諸行事を終えて祝宴に移り、宮島町長の挨拶の後、私が「東京真田町の会」の会長としてご挨拶を申し上げ、乾杯の音頭を取りました。旧知の人、初めての人を含め、故郷の皆さんと本当に久しぶりの歓談の時間を過ごすことができ、心温まる思いでした。和やかなうちに祝宴を終えて、文化会館裏の広場でタイムカプセルの除幕式が行われました。このカプセルには三十年後のメッセージ、手紙、写真、カセットテープ、行政資料が入れられましたが、私共参加者は適当な大きさの石に名前と昭和六十三年十月一日と日付を書いて、カプセルに入れまし

た。真田中学校二年生の山崎希さんが、三十年後の子供達へのメッセージを朗読し、タイムカプセルが一同見守る中を土深く埋められました。このタイムカプセルが開かれる時、真田町は果してどんなに発展しているのか楽しみです。

この記念式典の様子は、NHKテレビのローカルニュースや地方紙でも大きく報道されました。

(会長 小林記)

以上



▲見事な演奏を聴かせてくれた「消防音楽隊」(30周年記念式典から)



この人この顔

このコーナーでは、真田町出身の方をご紹介していきたいと思っています。

第一回目としまして、会計理事の三井さんから寄せられましてお便りをご紹介します。

東京真田町の会が設立され数

日してから、一人の大先輩より電話がありました。花岡博さんです。今回は出席出来ませんでしたけれども次回は是非出席したいとの事でお話を伺いました。

花岡さんは明治・大正・昭和と苦勞された貴重な存在です。二人でお話するだけではもったいないような気がして略歴と写真をいただきました。会報にて御紹介をお願い致します。

花岡 博氏 略歴



□明治三十八年、傍陽村長花岡熊次郎の三男二女の末子として傍陽大庭に生まれる。

□大正十五年、長野師範卒業

□昭和十九年四月、内務省の方事務官に抜擢。

□昭和二十七年、岐阜県人事委員会初代事務局長に選任される。

□昭和三十二年、岐阜県教育長就任

□昭和三十八年、沖繩派遣教育講師団々長拝命。

□昭和四十一年、国立大雪青年の家初代所長に就任。

□昭和四十三年、青年海外派遣の南欧班の団長拝命。

□昭和四十七年、亜細亜大学の教授兼就職部長となる。

□昭和五十一年、勲三等受章

○主著 論語への招待
文化総合出版社発行

■れぽくも

役場庁舎が新庁舎建設のため取り壊されました。
長い間、くろくさまでした。



寄付御礼

「東京真田町の会」に御芳志下さった方々多額の御寄付厚く御礼申し上げます。

(敬称省略)

荒	荒	飯	石	小	坂	清	鈴	秦	塚	中	堀	三	柳	山
木	木	島	垣	宮	口	水	木	木	田	沢	内	井	沢	崎
孝	廣	き	節	孝	弥	清	金	志	恒	清	俊	芳	義	貞
一	之	よ	子	雄	三	晴	春	お	雄	丸	郎	祝	次	



編集後記

▼ふるさと真田町の誇りとする豊かな自然をイメージし、タイトルを「日本ダボス」といたしました。

▼創刊号発行、初めての紙面づくりのため、いろいろと不手際があろうかと思いますがお許しください。また、発刊が遅れましたことお詫び申し上げます。

▼ご投稿をお寄せください。

会員、新会員、家族、趣味、自慢料理、友人、知人の店、職場等の紹介、旅日記、俳句、短歌詩等の作品、ニュース、近況なんでもけっこうです。また、読後のご感想もお待ちしております。

▼東京真田町の会は、年会費千円です。(入会費不要) 広告やご寄付は全く自由でご希望の方のみで決して強制的なものではありません。また、真田町出身者あるいは関係者で、お知り合いの方で入会ご希望の方がいましたら年会費千円を、郵便振替用紙でお振り込みください。(新会員とご明記ください。) ご入会お待ちしています。なお、会員で会費未納の方も年会費千円を郵便振替用紙でお振り込みください。

振込先

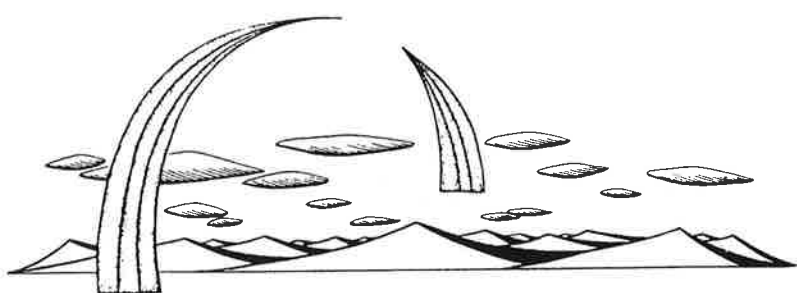
「東京1・255577」

東京真田町の会

まで

▼創刊号祝いの広告をいただきました皆様、ありがとうございます。次回からは、もう少し広告らしい広告もお願いできるようにしたいと思います。

▼表紙の写真は、真田町とスイスダボス町との姉妹提携の記念塔です。



祝 東京真田町の会 会報創刊

広げましょう 同郷の和と輪

あいうえお順

みずぐ興業株式会社 代表取締役 荒木 廣之 (下原出身) 東京都板橋区舟渡二一十一 TEL (〇三三) 九六五一四六九二	国際浮出印刷株式会社 代表取締役 飯嶋 徳磨 (中組出身) 川口市芝 四八七九 TEL (〇四八二) 六五一三三七四	内科 石垣 医院 院長 石垣 貞一郎 (曲尾出身) 東京都北区十条仲原三一二十一 TEL (〇三三) 九〇〇一八六三三	成瀬駅前郵便局 局長 内海 章緒 (傍陽出身) 町田市南成瀬一十一一二五 TEL (〇四二七) 二五一四二九一	東亜企画株式会社 代表取締役 大久保 作吉 東京都渋谷区千駄ヶ谷四一七七一 TEL (〇三三) 四〇〇一三六六一 FAX (〇三三) 四〇〇一三七〇七
三東フォーム株式会社 代表取締役 大久保 照男 (大日向出身) 本社 東京都新宿区舟町七 織田ビル TEL (〇三三) 三五一一九七六一 FAX (〇三三) 三五一一九七六三	ハウス建装株式会社 代表取締役 大塚 克彦 東京都武蔵野市中町二一六一二	倉島機械製作所 倉島 保 (角間出身) 東京都足立区梅島二一〇一〇 TEL (〇三三) 八八六一二〇二六	株式会社 英 (ハナブサ) 代表取締役 小市 英一 (真田町本原出身) 東京都世田谷区梅丘一一二六一二 TEL (〇三三) 四二六一二四二一	小市忠雄税理士事務所 税理士 小市 忠雄 (本原出身) 千葉市幕張町四一三六 TEL (〇四七二) 七六一六二三一六
東京真田町の会 会長 小林 孝雄 (曲尾出身) 横浜市港南区日野四丁目四五一五 TEL (〇四五) 八四三一八〇四一	勝田電設工業株式会社 代表取締役 塩沢 和政 東京都江戸川区西小松川町三七番二号 TEL (〇三三) 六五二一八六七六代	東京真田町の会 副会長 清水 清晴 (中横道出身) 東京都狛江市東野川三十一十二二 TEL (〇三三) 四八九一〇七六三	清水硝子店 清水 征夫 神奈川県大和市西鶴間二丁目一四一〇 TEL (〇四六二) 七四一七六四六 FAX (〇四六二) 七六一九八八七	有限会社 協和ホームサービス 代表取締役 清水 萬三郎 (本原出身) 神奈川県津久井郡津久井町長竹二九六一五 TEL (〇四二七) 八四一〇六〇六

祝 東京真田町の会 会報創刊

広げましょう 同郷の和と輪

あいうえお順

(株)TKC東京パートナー 会計事務所 代表取締役 関谷 義久 (戸沢出身) 川崎市中原区小杉町二丁目四〇三十四番路一〇三 TEL (〇四四) 七一〇〇五五	(有)関東ホームサービス 代表取締役 高寺 徳信 (竹室出身) 東京都町田市金森二丁目四一番地八 TEL (〇四二七) 九六九七七五 FAX (〇四二七) 九六九四〇六	高寺税務会計事務所 東村山総合相談室 税理士 高寺 森雄 (竹室出身) 東村山市廻田町三丁目二六二六 TEL (〇四二三) 九四二四六八	東京真田町の会 会計理事 塚田 恒雄 (横尾出身) 千葉県柏市西山一丁目十一十八 TEL (〇四七二) 七五〇八二三	株式会社 塚田工務店 代表取締役 塚田 勝人 千葉県松戸市上矢切一〇〇番 TEL (〇四七三) 六三一〇五四四 FAX (〇四七三) 六三一〇八七八
中村恵美事務所 土地家屋 調査士 中村 恵美 (萩出身) 横浜市鶴見区北寺尾六丁目二八番四号 TEL (〇四五) 五七一四二九	ロシア料理 レストラン 渋谷 ロゴスキー 長屋 京子 (菅平出身) 渋谷区桜丘一六一三三和田ビル2F TEL (〇三三) 四六三二九一	羽毛田工業株式会社 代表取締役 羽毛田 璋 (傍陽出身) 千葉県柏市逆井四二八一五 TEL (〇四七一) 七二一八二三三	有限会社 バック信濃屋 代表取締役 半田 勝政 (大庭出身) 東京都品川区荏原三丁目八八六 TEL (〇三三) 七八七〇八八〇	株式会社 真田不動産 代表取締役 堀内 政 (横尾出身) 会社 東京都足立区綾瀬六丁目三〇一八 自宅 東京都足立区青井四丁目一〇 TEL (〇三三) 八四〇三二二一(代)
株式会社 牧内会計 社長 牧内 操 (萩出身) 埼玉県川口市青木二丁目二一七 TEL (〇四八二) 五六一三四一四	中央建設国民健康保険組合理事 社会保険 労務士 三井 周 (傍陽出身) 東京都江戸川区篠崎町三丁目九一九 TEL (〇三三) 六七七三六三六	国際浮出印刷株式会社 取締役 三井 芳郎 (大庭出身) 世田谷区船橋一丁目四八三三一 TEL (〇三三) 四八二九三三三	関東興産株式会社 代表取締役 武捨 義隆 (傍陽出身) 文京区湯島四丁目二二アイトウンB棟二二七 TEL (〇三三) 八一八一九五三五	株式会社 ムシヤ 代表取締役 武捨 逸雄 (傍陽出身) 台東区下谷二丁目一七一三 TEL (〇三三) 八七五二六五一

祝 東京真田町の会 会報創刊

広げましょう 同郷の和と輪

あいうえお順

新お茶の水法律事務所 弁護士 山 口 元 彦 (横沢出身) 千代田区神田淡路町一―九一― ニューお茶の水ビル七〇二号 TEL (〇三) 二五五―七九六―	柳 澤 義 祝 (萩出身) 自 宅 東京都狛江市猪方三―二六―二〇 TEL (〇三) 四八〇―八八三九 勤務先 東京都中央区銀座二―二二―一六 ヤマト運輸株式会社 TEL (〇三) 五四一―三四一―	小泉グループ (株)全日本ガードシステム (株)G・M・C富士営業所 所 長 柳 沢 喜 三 郎 (萩出身) 裾野市須山富士サファリパーク内 TEL (〇五五九) 九八一―一五〇七	矢島長司事務所 税理士 矢 島 長 司 (上田市出身) 東京都新宿区新宿一丁目三〇番六号 TEL (〇三) 三五六―二五六― 二五六―	アートメディア木精会主宰 洋画家 森 本 幹 生 川崎市中原区小杉陣屋町一―五四七 TEL (〇四四) 七三三―〇二六七
勤務先 三菱重工業(株)相模原製作所 若 林 豊 (赤井出身) 神奈川県相模原市田名四二八五―一 TEL (〇四二七) 六二一―八九一―	山洋電気株式会社 代表取締役 社 長 横 沢 新 二 郎 (真田出身) 東京都豊島区北大塚一―一五―一 TEL (〇三) 九一七―一五一一	引越専門 興和陸運株式会社 取締役会長 横 沢 清 人 (大畑出身) 東京都江東区扇橋三―一八―一 TEL (〇三) 六四四―四三一五	不動産業 興和総業株式会社 代表取締役 横 沢 清 人 (大畑出身) 東京都中野区上鷺宮二―一八―四五 TEL (〇三) 九九九―四五三〇	有限会社 相模湖電設 専務取締役 山 本 俊 雄 (大日向出身) 神奈川県津久井郡相模湖町与瀬本町十六 TEL (〇四二六八) 四一二―二〇一

◎10月、11月と会を開き、皆様方のお陰で成就致しました。

読後のご感想をお願いします。

タイトルを日本ダボスとしました。今後もご投稿をお寄せ下さい。

お待ちしております。

真田町役場企画調整課
課 長 **三 井 俊 男**

高寺昭三郎
小市 邦夫
山宮 正久

真田町民憲章

私たちは、豊かな自然に恵まれた真田町の町民です。

私たちの真田町は、真田氏発祥の郷であり、たくましい町民の不屈の精神によって大きく発展し続けている町です。

私たちは、真田町の町民であることに誇りと生きがいを持ち、よい町民となるために、町民憲章を心のよりどころとします。

- 1 自然を愛し環境を整え美しい町をつくります。
- 1 生産に励み豊かなくらしのある町をつくります。
- 1 お互いに助け合い暖かい心がかよう町をつくります。
- 1 からだを鍛え心を豊かに健康な町をつくります。
- 1 教養を高め創意あふれる清新な町をつくります。

日本ダボス

平成元年 3 月23日 発行

発行 東京真田町の会

会長 小林 孝 雄

編集委員 清水 清 晴 三井 芳 郎

横沢 清 人 長屋 京 子

柳沢 義 祝 上原 辰 夫

印刷 中沢活版所

◎会報の発行に際しては、真田町役場

企画調整課の皆様のご協力を頂きま

した。